

女子挺身隊

田中 光（昭和2年生まれ）

昭和19年3月18日、女子挺身隊員として、中島飛行機武蔵野製作所へ行った。女学校を卒業して3日後の出発であった。級友の大半は挺身隊員として故郷を後にした。私は銀行勤務が内定していたのに、直接国のために働きたいと考え挺身隊に参加した。

出征兵士と同様に村民多数の人々に、軍歌「露営の歌」で送られての出発だった。友達と汽車に乗り上野駅へ、女子寮の寮父さんが迎えに来てくれた。工場と女子寮は東京都三鷹にあった。

翌日から適性検査が2日間、私は大きな旋盤に配属された。1ミリの10分の1の誤差に気を配る仕事、ねじ切りをしたり大変むずかしい仕事の内容であった。機械操作の仕方、マイクロメーターの使い方など、毎日が勉強の連続で充実していた。友達は棒材を切断する仕事、荒げずりや穴あけの仕事と油にまみれて挑戦していた。工場の機械は24時間、休みなく稼働している。女子挺身隊3交代勤務、深夜勤の時は翌日が休日となり、体が休めて嬉しかった。

寮は1部屋5人、仲良く過ごした。寮には、長野、水戸、秋田は2校、東京中野、自由学園の生徒、新潟は佐渡と私達で総勢80人くらいはいた。食堂と風呂は別棟にあり、産業戦士と言う事で食事は優遇されていると聞いたが粗末であった。量だけは男子と同様だったので多かった。布団と作業服上下2枚ずつ支給され、毎日その服を着て、頭には日の丸と神風と書いた鉢巻をしめての作業、真剣そのものだった。

ある休日、自由学園のリーダーが田無にある学園を見学に誘ってくれたので喜んで参加した。行って見て驚いたことは、戦時中なのに、のびのびと自由な教育を受けている子ども達がいた。羽仁モト子の経営で話も聞いたが、びっくりする事ばかりで、これが日本国かと思った。終戦後、私の生き方に指針を与えてくれる事になろうとは、その時は気付かなかった。

秋になって仕事もよく覚え能率も上がってきた矢先、11月23日、敵機B29が中島飛行機工場を爆撃してきた。本土攻撃の第一弾だった。武蔵野工場は、3階建が七棟、平屋建が数え切れない程たくさんあって、10,000メートル上空から見ると1棟が畳1枚の大きさに見えると言われていた。2棟と3棟の間に爆弾が落ちた。ひどく飛び散った。私は、2棟2階の奥の方で階段から遠い位置の窓際だった為、爆風とガラスの破片が飛んできて、生きた心地はしなかった。もう駄目かなとも思った。急いで防護頭巾をかぶり、職工に手を引かれ地下道へと走った。地下道は幅10センチくらいの大きなひび割れが出来ていた。友達は私の事を心配していたと言う。この空襲は突然きたので多くの方が死んだが人数は発表されなかった。警戒警報のサイレンと同時にB29は工場の真上に来ていた。工場は再三にわたって爆撃され、女子寮もやられてしまった。仕方なく男子寮の空部屋に移動した。断水の為、トイレは汚れ放題、風呂にも入れずシラミがわいた。困ったがどうする事も出来ず衣類を外へ持ち出してふるった。セーターにくい込んでいるシラミには手こずった。

日まじに爆撃は激しく地下道は危険な状態となり、20分くらい走った所にある防空壕へ避難し

た。山を掘りぬいて作った防空壕は大きかった。3本あって1号は女子挺身隊、2号は男子学徒、3号はベテランの職工だった。2号に爆弾が落ちて学徒が大勢死亡したが、数はわからなかった。また命拾いをして友達と手を取りあって喜んだ。

もう東京での生産は無理と言うことで2日間の休日があった。3日目にトラックに乗せられ到着した所は河口湖の湖畔、1月の始めであった。河口湖は氷で一面の銀世界だった。ブドウ酒工場の大きな樽を外に出し、機械が据え付けられていた。わずか2日間ですごいスピードの移転であった。4日目より作業開始、寒かったが全員生産意欲にもえていた。

寝泊りは民家に5人7人と分かれて生活した。食事は全員で別棟、当地は富士山の火山灰で水田が無く、麦、トウモロコシ、大豆が主食でコーリャンも時々食べた。米のご飯がほしかった。毎日、美しい富士山を眺め、麦畑を見ながら工場へ通った。朝昼夕と富士の色は刻々と変わって美しかった。戦争の事など忘れて見とれた。

東京は毎日のように爆撃されていた。B29は富士山を目標に飛んで来て富士の真上にくると向きを変えて東京へ、30分くらい経過すると東京の空がだいたい色に染まる「ああ…」これが戦争なんだと思った。東京は焼野原になったと情報が入った。戦争はつらく悲しくいやだ。

河口湖工場では、トランスが焼け漏電さわぎがあり、職工が機械に吸いつけられ、あと数秒遅れたら工場全員が感電の憂き目に遭うところであった。この時も助かった。

幾たびか命拾いをして、飛行機の部品作りに熱中した青春であった。

終戦となり挺身隊解除、帰郷の途中、笹子駅で汽車の脱線事故があり、復員軍人たちが死傷した。ここでも命を頂き8月27日、無事家に帰った。両親も妹たちも大変喜んでくれた。家族の笑顔を見ながらの赤飯はとても美味しかった。

最後にこの命がけの挺身隊の体験を通して忍耐、努力、協力、友情などの心を学んだ。一緒に挺身隊へ行った友達は3人もあの世へと旅立った。私はこうして心身共に元気で体験した事が書いて幸せである。